【教育長あいさつ】

平成２３年３月１１日の東日本大震災で被災されました皆様に、心よりお見舞い申し上げます。当市をはじめ沿岸部の自治体では、これまでに経験したことの無い甚大（じんだい）な被害を受け、現在もその復興に向け全力で取り組んでいるところです。

名取市は、全国の中でも住みやすい町として近年注目され、人口も徐々に増えております。こうした快適な居住環境は今に始まったものでは無く、市内に数多く分布する遺跡（いせき）や、守り伝えられてきた多数の文化財（ぶんかざい）の存在からも容易に想像することが出来ます。これらの文化遺産（ぶんかいさん）は、長い年月を経て築き上げられてきた郷土の生い立ちや、特色などを知る上で欠かすことが出来ない貴重な財産です。

残念ながら、これらの文化財の中にも東日本大震災により失われてしまったり、大きな被害を受けたりしたものがあります。地震大国と呼ばれる我が国では、度重なる地震・津波などの自然災害に見舞われてきましたが、先人達は苦しい状況にありながらも、身近にある文化財を次の世代へと引き継ぐことをくり返し、現代まで大切に遺（のこ）してくれました。我々も先人（せんじん）たちの意思を引き継いで、出来るかぎり次世代へと伝えてゆく必要があります。

例年 11 月頃に開催してきました「ふるさと名取の歴史展」は、今年度で 15 回目を迎えました。今回は、『災害と郷土の文化遺産』と言うテーマのもと、過去の大きな災害に関することや、今回の震災で失われてしまった文化財、被災をまぬがれた文化財の状況などを中心に展示しております。この展示会を通じて、失われてしまった文化財については、皆様の記憶として長く語り継いで頂き、今ある文化財についても、身近な地域の宝としてこれまで以上に大切にして頂ければ幸いです。

おわりに、今回の歴史展の開催にあたりまして、ご協力頂きました関係機関の皆様に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成２５年１１月

名取市教育委員会

教育長　丸山春夫

東日本大震災　津波碑

文化財の分類

文化財には、多種多様なものがあり、下のように大きく分類されています。この中で重要なものは、国・県・市などにより、指定文化財や登録文化財にされているものもあります。

有形文化財	有形の文化的所産で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの（これらのものと一体をなしてその価値を形成している土地その他の物件を含む。並びに考古資料及びその他の学術上価値の高い歴史資料	【建造物】 【美術工芸品】 絵画・彫刻・工芸品・書跡・典籍・古文書・考古資料・歴史資料
無形文化財	無形の文化的所在で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの	【演劇・音楽・工芸技術・その他】
民俗文化財	衣食住などに関する風俗習慣、民俗芸能及びこれらに用いられる物件で国民の生活の推移の理解のために欠くことのできないもの	【無形民俗文化財】 衣食住・生業・信仰・年中行事などに関する風俗慣習・民俗芸能・民俗技術 【有形民俗文化財】 無形の民俗文化財に用いられる衣服、器具、家具など
記念物	遺跡で我が国にとって歴史上又は学術上価値の高いもの、庭園、橋梁、その他の名勝地で我が国にとって芸術上又は鑑賞上価値の高いもの並びに動物、植物及び地質鉱物で我が国にとって学術上価値の高いもの	【遺跡】 貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅など 【名勝地】 庭園、橋梁、渓谷、海浜、山岳など 【動物、植物、地質鉱物】
文化的景観	地域における人々の生活又は生業及び地域の風土により形成された景観地	【棚田・里山・用水路など】
伝統的建造物群	周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的な建造物群で価値の高いもの	【宿場町・城下町・農漁村など】
文化財の保存技術	文化財の保存に必要な材料製作、修理、修復の技術など	
埋蔵文化財	土地に埋蔵されている文化財	

名取市文化財と歴史資料の地図

国指定文化財等	県指定文化財
市登録文化財	市指定文化財
その他歴史資料	遺跡範囲

１．災害と文化財

①【災害と文化財】

文化財は、それぞれの地域の長い営(いとな)みの中で、各時代の人々によって育まれながら現在まで引き継がれてきた大切な財産です。そのようにして受け継がれてきた文化財は、身近な地域の生い立ちや歴史・個性などを知る上で欠かすことの出来ないものです。今遺(のこ)されている文化財も、これまでに戦乱や自然災害などをはじめとする破壊や滅失(めっしつ)の危機に何度も直面してきたのかもしれませんが、保護や修理などを繰り返しながら大切に守られてきたのでしょう。

東日本大震災では、名取市も甚大(じんだい)な被害を受けました。

なかでも市海岸部の津波による被害は特に大きく、文化財の中にも残念ながら失われたり、修復困難な被害を受けてしまったりしたものがあります。過去の大規模な地震や津波による被害などを伝える様々な記録が注目されるようになりました。

市内にも、昭和 8 年（1933）の三陸地震津波で被災した経験を踏まえ、大規模な地震後の津波に対して注意を喚起(かんき)する石碑(せきひ)などが建てられていました。が、月日の経過とともに、その存在や当時の人々の想いは記憶から忘れ去られてしまっていたのかもしれません。現在、名取市も震災復興に向け全力で取り組んでいるところですが、今後の防災意識の向上や、過去や今回被災した経験や想いを風化させず永く後世に伝えて行くための文化遺産として、上記のような石碑なども次世代へと守り伝えて行く必要があります。

被災した閖上地区のようす（２０１１年３月末頃）

②【3.11 と文化財レスキュー活動】

太平洋沿岸部を中心とする自治体は、東日本大震災の地震・津波による深刻な被害を受けました。こうした事態を受け、文化庁では平成 22 年 3 月末に、被災した文化財などの早急な保全（ほぜん）と、その後に予想される被災建造物の撤去（てっきょ）などによる廃棄（はいき）や散逸（さんいつ）を防ぐための委員会をつくり、文化財レスキュー事業をスタートさせました。宮城県では仙台市博物館内に置かれた現地本部を拠点として、関係機関・団体などによる協力を得て懸命なレスキュー作業が行われました。実際の作業は、考古・民俗・美術などの各分野の専門家をはじめ、多くの方々の協力のもと、建物の内外に散乱した資料の回収や探索、回収した資料の一時保管や応急的な修理、海水や泥の洗浄作業や回収後のさらなる劣化などを防止するための殺菌作業などが行われました。これにより数万点にも及ぶ貴重な資料が救出されており、当市の資料では、国や県の指定文化財になっている熊野那智神社の懸仏（かけぼとけ）・銅鏡（どうきょう）、市指定文化財の新宮寺（しんぐうじ）文殊菩薩像（もんじゅぼさつぞう）と 4 体の仏像などがレスキューされました。

《国重要文化財　那智神社懸仏（かけぼとけ）・銅鏡（どうきょう）》

名取熊野三社の一つ熊野那智神社（くまのなちじんじゃ）に伝わった懸仏・銅鏡は、明治 31 年(1899)の那智神社再建の際に、社殿（しゃでん）の床下から見つかったものです。懸仏は、鏡面に仏像などを配したものを神社などの柱や軒などに吊るし懸けて奉納（ほうのう）したもので、当社のものの多くは鎌倉時代以降のものと考えられています。震災では、神社に展示・保管してあった懸仏などが、落下・破損するなどの被害がありました。平成 23 年 5 月 31 日には、文化庁の調査官や東北歴史博物館による被災状況の確認作業が行われ、同博物館で仮保管してさらに詳しく破損状況を確認することになりました。翌 6 月 1 日には文化財レスキュー隊・神社の関係者・宮城県職員・名取市職員の立会いのもとで丁寧に梱包され、東北歴史博物館へ搬出（はんしゅつ）されました。その後、文化庁の指導のもと今後の適切な保管方法などについて話し合いが持たれ、当面の間は、神社での適切な資料の保存や管理が難しいため、平成 25 年 3 月 1 日付で那智神社から東北歴史博物館へ寄託（きたく）されました。

震災被害のようす（那智神社懸仏）

《市指定文化財　新宮寺文殊菩薩像》

熊野神社（新宮社）境内の入口脇にある新宮寺文殊堂内に伝わった獅子の上に乗る文殊菩薩像で、つき従う「善財童子」・「仏陀波利三蔵」・「最勝老人」・「優填王」の４体の像も一緒に伝わっています。名取熊野三社とのかかわりが深い、山形県寒河江市の慈恩寺に伝わる文殊菩薩像と造り方が似ていると言われているもので、平安時代末頃に造られたものと考えられています。地震の揺れにより厨子の中で倒れ、後背の一部が破損してしまいましたが、文化財レスキュー事業によって応急的な修理が行われました。また、今年の５月から来年１月頃までの予定で本格的な修理が今現在も行われており、修理中にこれまで知られていなかった新たな知見が得られています。これについては、後に詳しい内容を展示しておりますので、併せてご覧ください。

震災被害のようす（文殊菩薩像）

震災被害のようす（厨子のなか）

③【過去の地震・津波の記録】

地震や津波は遠く人類誕生以前から繰り返し発生しており、いろいろな形でその爪痕（つめあと）を残しています。

私たちはこれらの残された爪痕から多くの情報を読み取ることにより、過去に発生した地震を復元することができます。そのためにいろいろな研究部門での調査が、1995 年 1 月の阪神淡路大震災を契機として活発に行われるようになりました。

今日のような気象観測の記録が残されているのは明治頃までのことで、江戸時代以前のものは古文書（こもんじょ）などの記述に残されているものから読み取ることができます。ただし文字による記録では平安時代頃までで、考古学の分野では縄文時代頃までのことが分かっています。さらに地質学の分野ではこれ以前の古い時代、数千年単位での爪痕も調べることができます。それぞれの部門が連携を取りながら現在研究を進めています。

とりわけ、名取市がある仙台平野では、津波で形成された堆積物（たいせきぶつ）、海岸段丘（かいがんだんきゅう）などの地質や生物化石（せいぶつかせき）の調査、遺跡での発掘や古文書などの古記録など、それぞれの部門での調査が進み、多くの事実が分かっています。

ここでは名取市内で確認されたこの爪痕について、順次紹介しましょう。

○明治以降の主な地震津波について

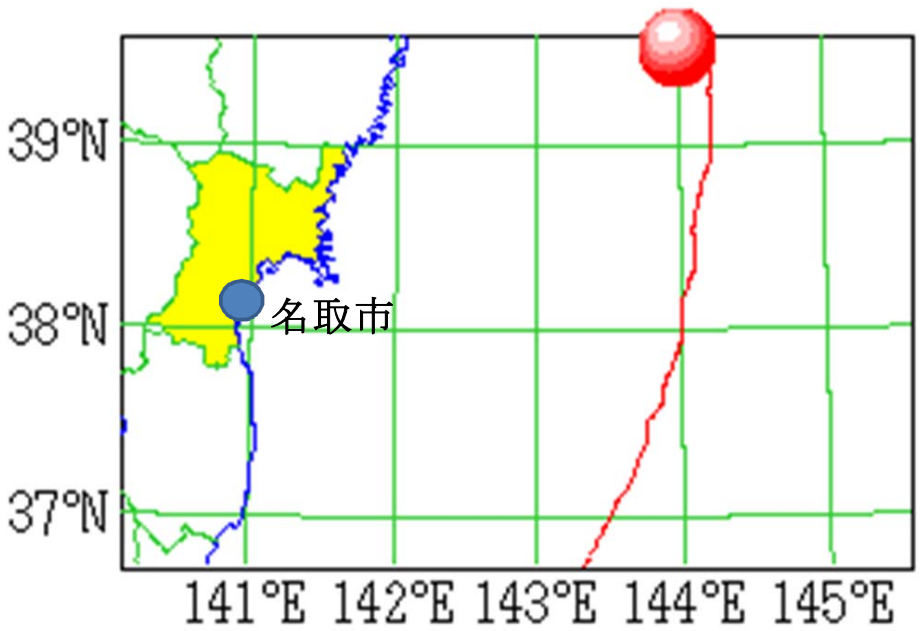
明治から昭和にかけて発生した地震のなかで、津波が発生しその被害が大きかった地震について、『宮城県海嘯誌』（1903）、『宮城県昭和震嘯誌』（1935）などから名取市での被害状況を見てみましょう。

《明治三陸地震》

「名取郡　本郡の沿海六郷、東多賀両村に於ては六月十五日午後八三十分頃俄然波濤を起し襲来の響恰も遠雷の如くなりし而て海嘯の侵入すること三回なりし」「家屋被害では、閖上町家屋浸水一〇棟」

と、県北部、岩手県の被害に比べて当地域は軽微であったことが分かります。

「明治三陸地震」 1896(明治 29)年 6 月 15 日、三陸沖、M8.2 程度

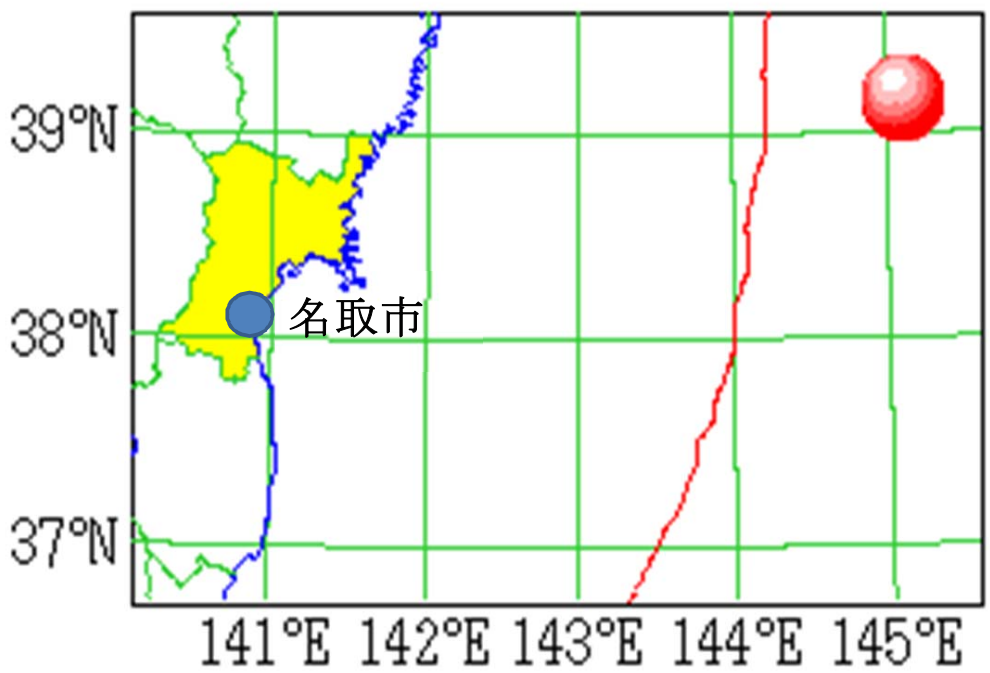


三陸海岸から約 200km の沖合いに震源があったため、各地の震度は弱程度（当時の震度階級は烈・強・弱・微の 4 段階。弱は現震度 2～3 に相当）でした。地震による直接の被害はありませんでしたが、長く続く振動だったため、地震後北海道から牡鹿半島に至る海岸が大津波に襲われ、三陸海岸にも大被害をもたらしました。宮古では地震後 18 分に引き波で始まり、20 時 07 分には最大波高 4.6m を示しました。中でも最も激しかったのは陸前国吉浜（現大船渡市三陸町吉浜）で、波の高さは 24.4m に達しました。この津波は遠く太平洋を横断してハワイおよびサンフランシスコにも到達しました。災害地を通じて家屋全半壊・流失 10,617 戸、溺死者 27,122 人にのぼります。

《昭和三陸地震》

「床上浸水 3 件　床下浸水 17 件　計 20 件」の被害が報告されており、当時の体験談として「昭和 8 年の津波のときには、貞山堀（ていざんぼり）を逆流し、中島丁まで津波が来たが、その後は町区にあがらなかった」とあり、当時閖上の全戸数の内被害があったのは 2%にすぎず、人的被害もありませんでした。この時の詳細は津波碑に詳しく、これによれば「30 ㌧級の船舶が畑地に押し上げられ、漁船の破損も多かった」ことが記されています。

「昭和三陸地震」 1933(昭和 8)年 3 月 3 日、三陸沖、M8.1



宮古市・石巻市・仙台市・福島市で震度 5 を観測するなど、北海道から近畿・中国地方にかけての広い範囲で有感地震となりました。地震による被害はがけ崩れや石垣・堤防の決壊など多くはありませんでしたが、地震後約 30～60 分の間に津波が北海道と三陸沿岸を襲（おそ）い、大きな被害が出ました。

岩手県沿岸の津波の高さは 10m 以上にも及び、津波被害の大半以上は岩手県が占めました。津波は、九州に至る太平洋沿岸各地、さらには北米・南米の太平洋沿岸にも到達しました。全体での死者・行方不明者 3,064 名、負傷者 1,092 名にのぼります。

名取での人的被害はありませんでしたが、家屋への浸水や漁船が畑へ打ち上げられるなどの被害がありました。この津波での被害を記念して同年 11 月に震嘯記念（しんしょうきねん）の碑が建立されました。

《チリ地震津波》

名取では、津波の被害として「**死者２名　負傷者２名　行方不明３名　家屋の全壊１戸　被災者概数７名**」と記録されています。当時の状況については、気象庁の報告書に詳しくあるので紹介しましょう。

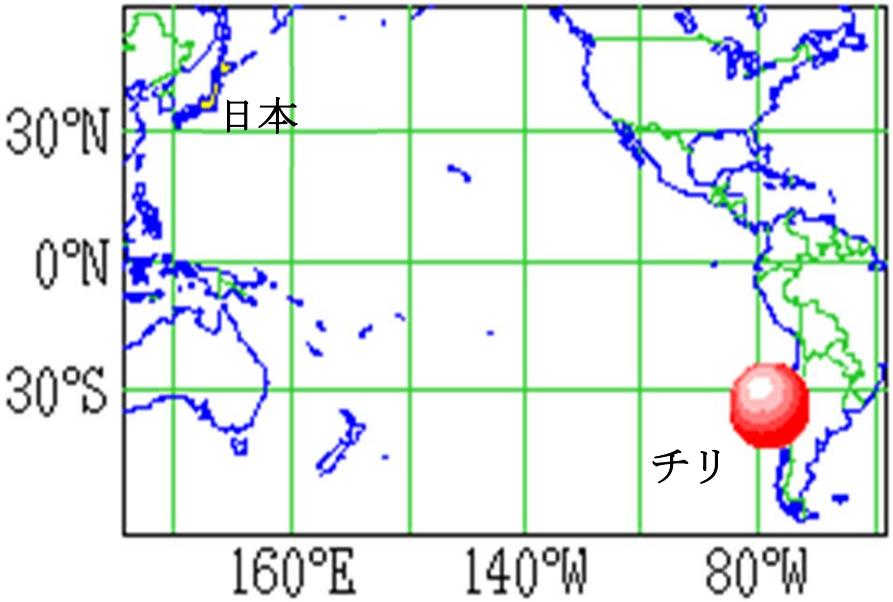
「名取市閖上　25 日 10 時閖上海岸に行き、閖上漁業組合の専務理事相沢氏にあって聞き込みをした。その結果は次のとおりである。

波の押し・引きの周期は日中は 40 分前後で、夜には周期は長くなり、振幅も小さくなってきた。なお潮がやってくる 0ー3 時ごろの間に(睡眠中で、はっきりした時刻はわからなかったが)、平常と違った異様な海鳴りがあり、家内の人々を起こしたという者がいく人かいた。海岸線から700mの河口に名取川量水標(りょうすいひょう)(地建所属)があったが当日は観測者はるすだったので、後日仙台工事事務所から観測値の報告を受けた。24 日の 6 時には、2.1m(T.P.からの波高 0.94m)の高い波高(はこう)を観測しているが、実際の津波の最大波高は、これ以上あったと推定される。岸壁のこん跡から最大波高を推定すると、2.3ー2.5m である。

被害を見ると土地が高く、また防波堤の高さは 3m もあるので、住家には全く被害がなかったが、港内入口の岸壁が 9 ㎡ぐらいくずれ落ちていた。また早朝(4ー5 時)出漁の際、港出口で引き潮にあい、船底が海底に接して、動きがとれなくなっているうち、大潮が来襲して転覆し(亘理や荒浜でも同様な事故があった)、死者２名、行方不明５名を出した。なお部落の東側に、200m 幅の名取川があったため、港内にはいる津波は大きくはなかった。」(気象庁『技術報告第８号』1961)

とあります。この津波では人的被害はあったものの、家屋の流失などの被害報告はありませんでした。

「チリ地震津波」 1960(昭和 35)年 5 月 23 日、南米西部、M8.5



日本時間 5 月 23 日 4 時 11 分にチリで発生した地震による津波が 22 時間半ほどの時間をかけて日本沿岸に到達しました。花咲 339cm、八戸 582cm、など三陸沿岸北部で異常に高い地区がありました。このチリ津波では、北海道南岸から沖縄まで被害がありました。特に、東北地方の三陸沿岸では死者 119 人、建物の全壊流失のほか道路の損壊や橋の流失、堤防決壊など、甚大な被害となりました。

閖上地区では潮がやってくる深夜 0～3 時頃の間に異常な海鳴(うみな)りがあり、24 日の 6 時には波高 2.1m を観測しました。高さ 3m の波防堤によって住家に被害はありませんでしたが、早朝出漁の際、港の出口で引き潮に遭い、船底が海底に接して、動きが取れなくなっているうちに大潮が来襲して転覆し、死者 2 人、行方不明者 5 人を出しました。同様の事故は亘理や荒浜でも起こりました。

災 害 年 表

奈良時代～江戸時代

時代区分	西暦	和暦	災害の記録	名取市近郊の出来事	日本の主な出来事
奈良時代	416	允恭5	遠飛鳥宮付近で地震　『日本書紀』にはじめて「地震」の記述がなされる		604憲法十七条を制定
	684	天武12	土佐・南海・東海・西海地方で地震　『日本書紀』に津波と思われる記述「大潮高騰、海水瓢蕩（海水が高く立ち上り、漂い流れた）」あり	713陸奥国に丹取郡を置く 724陸奥多賀城を築く 728丹取軍団を改め玉造軍団となる 742宮城郡木の下に陸奥国分寺を創建	701大宝律令 710平城京遷都
平安時代	830	天長7/1/3	出羽国大地震　秋田城被害をうける	797坂上田村麻呂征夷大将軍に任じられる	
	850	嘉祥3/	出羽国に大地震　最上川の岸崩れ、海水は国府から6里のところまで迫った		
	869/7/13	貞観11/5/26	**貞観地震【M8.3】** 陸奥国大地震起こり、多賀城の城郭などが倒れ、海水が多賀城下まで流れ込む。水死者は1000人に上る	1123熊野三社が勧請される 1189源頼朝平泉を攻める	
鎌倉時代			850年、869年、887年(大阪湾)で津波が起きた記事がありますが、それぞれ津波を「海水漲移」、「海水暴溢、驚濤涌潮」、「海潮漲陸」と書いており、古代にはまだ「津波」という言葉は現れていません	1229名取新宮寺の一切経写経が始まる	1192源頼朝征夷大将軍になる 1274蒙古軍来襲 1333鎌倉幕府滅亡
南北朝・室町時代			鎌倉、室町時代の記録では津波のことを「大波浪」、「大山のごとくなる潮」、「大塩」などとよんでいました	1351岩切合戦 1352多賀国府足利方に落ちる 1398伊達政宗（9世）家臣を高舘城に置く 伊達氏名取郡へ進出 湊神社勧請される	1338足利尊氏征夷大将軍になる 1392南北朝合体 1467～77応仁の乱

時代区分	西暦	和暦	災害の記録	名取市近郊の出来事	日本の主な出来事
戦国時代	1586/7/10		ペルー地震により陸中まで津波あり		1573室町幕府滅亡
				1586豊臣秀吉益田の関所を廃止、その後増田と改称	1590豊臣秀吉全国統一
				1596政宗領内検地を行う	
江戸時代				1603伊達政宗岩出山より仙台城に移る	1600関ヶ原の戦い
	1611/12/2	慶長16/10/28	**慶長地震【M約8.1】** 三陸地方で強震　震害は軽く、津波の被害が大きかった　波浪岩沼附近まで襲う　津波のため領内で1783人溺死、牛馬85匹溺死仙台城石垣・櫓等破損		1603徳川家康征夷大将軍になる
	1613	慶長18/8/3	辰刻地震	1613年9月遣欧使節団支倉常長ら180人牡鹿郡月浦を出帆	
		11/26	亥下刻地震		
	1616	元和2/7/28	地震　仙台城城壁楼櫓破損す　三陸地方に強震の後大津波	1615耕龍寺山門できる	
	1620	元和6/4/2	仙台大町で大火		
	1633	寛永10/10/17	戌の上刻、大地震、子刻大震		
	1646	正保3/4/26	大地震　仙台城石垣数十丈破損、三階の亭櫓3つ顛覆　白石城石壁櫓破損		
	1651	慶安4	亘理郡に津波の伝あり		
	1653	承応2/2/8	仙台南穀町より出火　約1町焼失		
	1654	承応3/1/13	未刻大地震	1668貞山運河完成(阿武隈川から名取川)	
	1668	寛文8/7/21	申下刻仙台大地震　本丸石垣破壊		
	1676	延宝4	常陸水戸、磐木、陸奥に津波　人畜溺死、家屋流失	1669年蔵王山爆発降灰	
		延宝5/9/17	塩釜、宮城郡に津波あり、数十回繰り返して襲来す		
	1687		ペルー地震により亘理郡に津波襲来　波高約1尺5寸		
	1689	元禄2/8/	陸中に津波の伝あり		
	1707	宝永4/2/13	仙台東七番町より出火　東八番町、荒町、石垣町、土樋、石名坂、穀町、南材木町、染師町、五十人町、六十人町、南鍛冶町、三百人町へ延焼、およそ475戸焼失、4人焼死		1707富士山噴火
		2/20	仙台北四番丁橋元正九郎より出火　1558戸焼失、4人焼死		
	1708	宝永5/閏1/24	仙台龍宝寺門前より出火　中島町、台町、二番町、三番町、二日町、国分町、原町へ延焼。孝勝寺堂宇焼亡、侍屋敷863戸、寺社43、門前町10、足軽・職人40、町屋敷812焼失、8人焼死		
	1711	正徳元/9/7	大洪水　刈稲押流される		
	1716	享保元/10/3	仙台地方地震のため所々破損		1716享保の改革
	1718	享保2/4/3	強震あり		
	1719	享保14/1/20	宮城・名取両郡諸浜の漁船難風に遭う　11人溺死		
		7/1～2	暴風雨洪水		
	1727	享保12/3/16	仙台城下北二番町角より出火　1525戸焼失、死者2人		
	1730	享保15/5/25	チリ地震による津波　宮城・桃生・牡鹿・本吉の諸郡の田畑に損害		

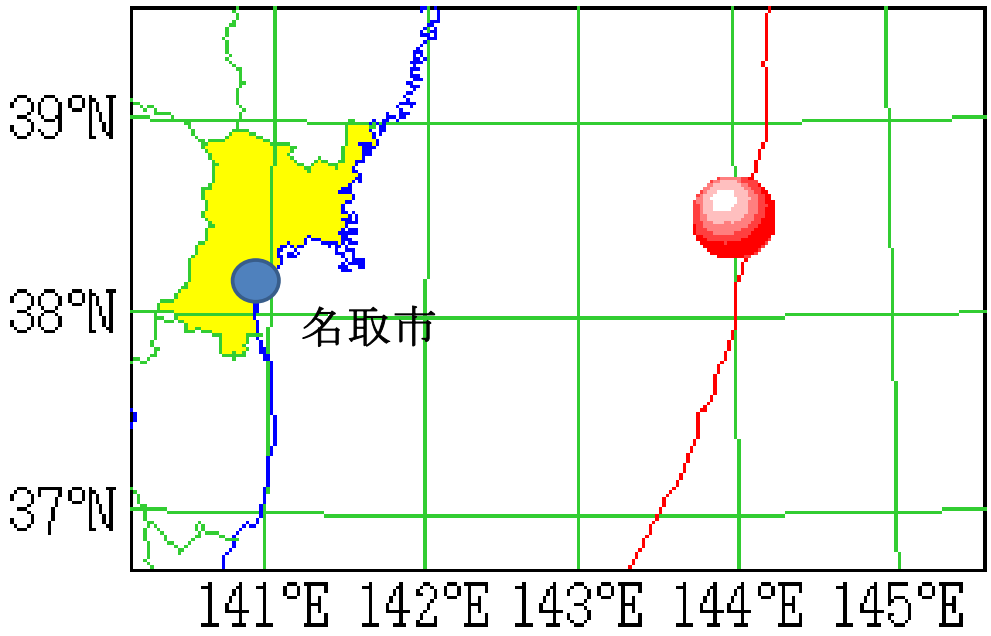
江戸初期になると土佐国で「四海波の大潮」、伊勢国で「四海浪打ちて…」という表現が現れ「四海波（浪）」が津波を意味する言葉として使われていたようです。

三陸海岸を測量中海上で津波に遭遇したスペインの冒険家セバスティアン・ビスカイノが著した『ビスカイノ報告』には、「海上に有りて激動を感じ、又波濤会流して我らは海中に呑まれるべしと考え…」と

時代区分	西暦	和暦	災害の記録	名取市近郊の出来事	日本の主な出来事
江戸時代	1731	享保16/9/7	岩代・桑折領で地震　白石城城壁破壊し、山崩れ、地滑りにより、小原温泉の水脈が一時閉塞　仙台にも被害多し　小津波発生		
	1736	元文1/3/20	酉刻より暁に至り数十回地震あり、城中城下破壊、澱橋落ちる		
	1741	寛保1/2/19	柴田郡金ヶ瀬町で火災　180戸余焼失、焼死1人	1743須川岳(栗駒山)噴火	
	1751	宝暦元/閏6/2	本吉・桃生・牡鹿地方に津波		
	1751/5/25		チリ・コンセプシオン地震にて陸中海岸に小津波		
	1752	宝暦2/2/6	仙台北一番町木幡又兵衛宅より出火、7日卯刻に至り鎮火。1527戸焼失		
	1757	宝暦7/7/29	牡鹿郡女川浜(現女川町女川浜)で火災　倉庫3棟、塩2900苞余、138戸焼失		
	1758	宝暦8/2/23	名取郡岩沼町で火災　108戸焼失		
	1762	宝暦12	領内2～3回大地震あり、地裂し、人家損害多し		
	1764	明和1/10/27	仙台伊達六郎屋敷、保春院、泰心院、その他北目町、染師町、田町、荒町、南鍛冶町、南材木町など892戸焼失、2人焼死		
	1767	明和4/4/7	大地震		
	1768	明和5/7/21	早朝より大雨　広瀬川、名取川で洪水　閖上で水が三尺押上げ、町内舟でゆく		
			大雨洪水となり澱橋・大工橋・評定橋・長町橋落ちる　川沿いの町被害多し		
	1772	安永元/1/26	仙台城下大町、立町、肴町、南町などで651戸焼失		
		5/3	地震のため損害多し		
	1781	7/23～28	大雨のため洪水　不作	1772封内風土記25巻成る	
	1782	天明2/7/18	～19　大雨のため迫川等出水、堤防各所で決壊　不作		
	1793/2/17	寛政5/1/7	**寛政地震【M8.0～8.4】** 昼大地震、暮れまで10ヶ度、夜に至り30戸余に及ぶ　正月7日から2月まで地震続き12人、馬13頭圧死、家屋の倒壊1060余戸　沿岸に津波が来て、気仙沼で300余の家屋が流出した		
	1796	寛政8/3/25	大風被害大し		
	1835	天保6/6/25	仙台地方地震あり　仙台城石屏崩れる　津波のため民家数百破壊される　溺死者多数		1814天保の改革
		閏7/7	大風雨洪水　仙台大橋落ち、民家2416宇流失、1000余人溺死		
		閏7/23	洪水　大橋仮橋流される　風水害のため凶作		
	1838	天保9/2/10	大風雨宮城名取亘理の海岸地帯で漁船21隻の漁船遭難漁夫42人溺す		
	1851	嘉永4	仙台地方に大暴風、高潮、津波		1851ペリー浦賀に来港
	1855	安政2/8/3	地震　夜までに数十度に及ぶ		
		10/2	江戸大地震　仙台邸破壊多く死者50余人、秋保温泉の湧出全く止まり翌年5月再び湧出		
	1856	安政3/3/15	三陸地方地震津波、桃生郡雄勝で浸水三尺		
	1859	安政6	封内烈風甚雨　不作		1860桜田門外の変
	1861	文久元/9/18	大地震		
	1864	文治元年	大雨洪水不作	1864清水峰神社絵馬奉納	1867大政奉還 1868慶応を明治と改元

江戸時代の増田地区にあった寺院「広積院」の日記には「寛政五年七日九ツ半(午前1時)大地震、二時までに三度大地震・・・」という記録があります

「貞観地震」 869 年 7 月 13 日（貞観 11.5.26） 三陸沖、M8.3



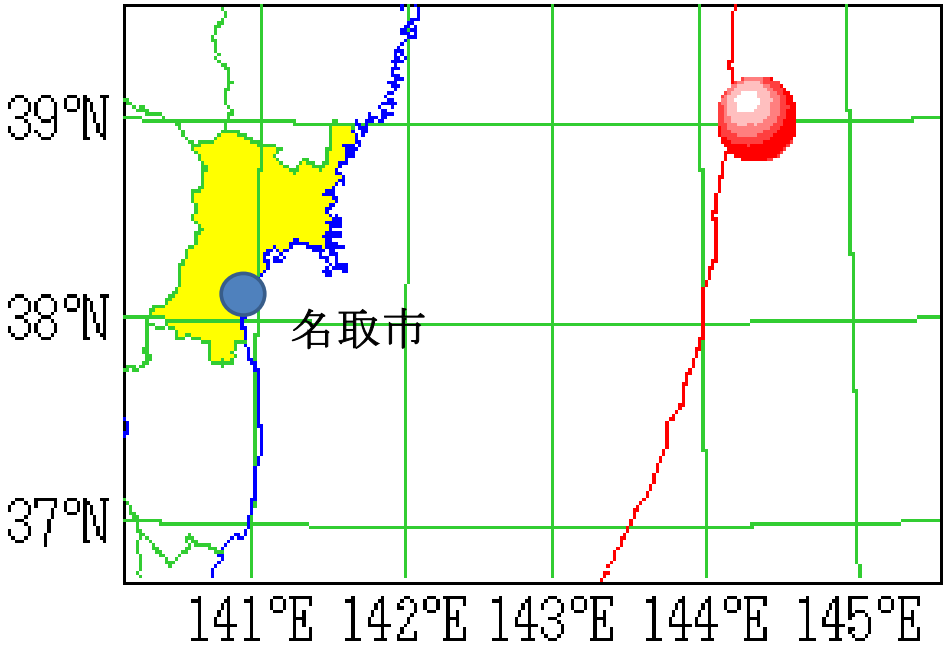
記録（『三代実録』）には城郭、倉庫、門櫓、垣壁が崩れ落ち、倒壊したものが多数あり、人は倒れて起きることができないほどであったことが書かれています。

津波も発生し、「海口哮吼。聲似雷霆。驚濤涌潮。泝漲長。忽至城下・・・溺死者千許・・・。」とあり、海水は城下(現在の多賀城)にまで到達し、多くの溺死者があったことを伝えています。市内では、この時の津波によって形成された砂の層が、現在の海岸線から4キロメートル前後の内陸部で確認されています。

この時代には、津波という言葉はまだなく、「海水暴溢」と書かれています。

※震源地ほか地震データは、仙台管区気象台作成のもの

「慶長地震」 1611 年 12 月 2 日(慶長 16.10.28) 三陸沖、M8.1

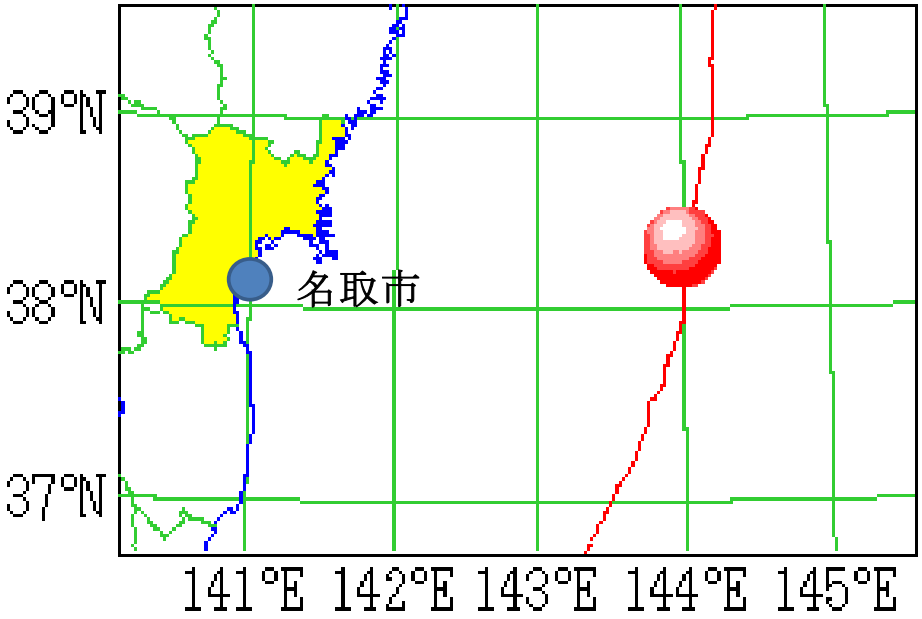


三陸地方での強震。仙台城の石垣・櫓など破損し、伊達政宗領内で死者 1,783 人、牛馬 85 匹が溺死したと記録されています。岩手県から宮城県沿岸で 4～20m の津波があったとされ、『貞山公治家記録』では宮城県沿岸の様子が「巳刻過キ、御領内大地震、津波入ル。」とあります。

『駿府記』（徳川家康側近の人物による日記）によると岩沼沿岸では「千貫松伝承」として阿武隈川沿いの千貫山の麓（当時の海岸線から約 4 km）まで津波が遡ったと伝えられています。

また、この年の前後に書かれた『駿府記』には「政宗領所海涯人屋、波濤大漲来、悉流失す溺死者五千人。世曰津波云々（人々は津波といっている）」という文章がみられ、慶長 16 年当時、津波という言葉が世間一般に通用していたことがうかがえます。

「寛政地震」1793 年 2 月 17 日（寛政 5.1.6）、三陸沖、M8.0～8.4



三陸沖を震源とする地震。当時の記録には「昼、大地震、暮れまで 10 ヶ度、夜に至り 30 戸余に及ぶ」（『桂記』）とあり余震が多かったことがわかります。この余震は以後 10 ヶ月も続いたそうです。仙台卦内で死者 12 人、家屋の倒壊は 1,060 棟以上、馬 13 頭の圧死も報告されています。

陸中（現岩手県）・陸前（現宮城県）・磐城（現福島県）沿岸・銚子に津波が襲来し、大船渡での波高は 9 尺(2.7m)であったいいます。被害は現在の岩手・宮城・福島・茨城各県に及び、江戸でも極小の被害がありました。全体では家屋倒壊や流失 1,730 棟以上、船損壊や流失 33艘、死者 44 人以上とされています。

災 害 年 表

明治時代以降

年号	西暦	年/月/日	災害の記録	宮城・名取の出来事	日本の主な出来事
明治	1868	元年		陸奥国を磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥の5ヶ国に分つ、名取郡は陸前国 1871仙台藩を廃し仙台県を置く 1872仙台県を宮城県と改称	1868慶応を明治と改元 1869東京に遷都 1869藩籍奉還 1871廃藩置県
	1877	10/5/10	チリ地震による津波　釜石で波高3m 仙台河原町で大火　220戸焼失	1876明治天皇東北巡幸	1873徴兵制実施 1877西南戦争
	1882	15/9/7	旧仙台城二の丸雷火により焼失		
		7～9月	亘理郡荒浜にコレラ大流行	1887東北本線上野-仙台-塩釜間開通	
	1889	22/9/11	県内に暴風雨　大洪水となり大橋・澱橋・広瀬橋等流失	1888増田駅営業を開始 1890東北本線青森まで開通	1889帝国憲法発布
	1895	28/7/7	県内にコレラ死者多数		1894日清戦争
	1896	29/6/19	**明治三陸地震【M8.2】** 岩手県沖を震源とする　揺れによる被害は少なかったが、津波が北海道から牡鹿半島にかけて襲来し、宮城県では3452人、岩手県では最も多い18158人の死者を出した　1万以上の家屋7千の漁船が流出した	1895蔵王山爆発仙台に降灰	1895日清講和条約調印 1904日露戦争
	1897	30/2/20	宮城県沖地震【M7.4】		1905日露平和条約締結
	1910	43年 8/13	小田原遊郭大火 17日まで連続降雨　特に11日豪雨　河川氾濫		1910日韓併合
大正	1912	元年			1912明治天皇崩御、大正と改元
	1913	2/8/27	大水害		
	1915	4/11/1	三陸沖地震　志津川港で波高約3尺		1914第一次世界大戦
				1918県内で米暴動	1918第一次世界大戦休戦条約締結
	1919	8/3/2	仙台南町で大火　役所をはじめ会社など703戸焼失		
	1923	12/9/1	関東大震災【M7.9】 地震後火災が発生、全体で死者行方不明者10万5千人余　山崩れ、崖崩れ　関東沿岸に津波、波高は熱海で12m、相浜で9.3m	1926仙台に市電がはしる	1925東京放送局ラジオ放送開始

午前5時50分頃西南方と思しき方より轟然たる大音響のきこゆるよと思う間もなく大震動きたりて・・・震動時間凡そ5分間にしてやみたり古老の言に依れば安政の大震よりも強きほどにて当地方には覚えなきことなりと云えり・・・(2/21河北新報)

年号	西暦	年/月/日	災害の記録	宮城・名取の出来事	日本の主な出来事
昭和	1926	元年	この頃の三陸地方には「井戸水が急に減れば地震が起こる」「地震後に雉子が鳴けば津波が来ない。鳴かないと津波が来る」という言い伝えがありました	1928閖上海運橋竣工 1928東北産業博覧会 1928東多賀村に町制を施行閖上町と称す(1,141戸6423人) 1928仙台放送局放送開始	1926大正天皇崩御、昭和と改元
	1929	4/3/9	高舘小学校校舎焼失、8月再建	1929閖上町に閖上港開設 1933経の塚古墳出土の埴輪鎧2個、重要美術品として国指定	1931満州事変
	1933	8/3/3	**昭和三陸地震【M8.1】** 岩手・宮城・福島・茨城で最大震度5　大津波が発生し、死者行方不明者3064人　津波の最大遡上高は気仙郡綾里村(現大船渡市三陸町の一部)で海抜28.7mを記録	1933/11月 震嘯記念碑建立 閖上のほかに、本吉郡大谷海岸、気仙沼市波路にも同様の碑が建立されました	
	1936	11/11/3	宮城県沖地震【M7.4】 宮城・福島両県で非住家全壊3　その他小被害　道路欠損35ヶ所 3日午前5時46分ごろ仙台地方強震の襲来があり・・・市民がはだしで霜凍る白明の街路に飛び出す騒ぎを演じ約10分間に亘って恐怖地獄に魂を揺すられた・・・昭和8年3月3日以来の強震であったが、恐怖の的である海嘯は幸いなかった・・・(11/4読売新聞宮城版)	1942藤原実方郷の945年祭 1945/7/1仙台空襲　仙台城瑞鳳殿焼失　高舘村被弾	1937日中戦争 1943サイパン島玉砕 1945広島・長崎に原子爆弾投下 1945日本無条件降伏 1946東京裁判開延
	1947	22/9/16	カスリーン台風　県内の田畑被害6万ha、死者10人、家屋流出106戸	1947 6・3・3・4教育制度実施、増田、閖上、下増田、館腰、愛島、高舘、新制中学校開校	
	1948	23/9/16	アイオン台風　県内の流出家屋121戸		
	1949	24/9/1	キテイ台風来襲	1949館腰山囲古墳より副葬品金銅製頭椎の太刀等発掘	
	1950	25/8/4	東北地方に豪雨　被害多し		1950朝鮮戦争勃発
		10/31	ルビー台風来襲		
	1951	26年	仙台二日町で大火　80戸焼失	1952ラジオ仙台(現東北放送)放送開始	1951日米安保条約調印
	1952	27/1/22	仙台市で大火　240戸焼失		
		3/4	十勝沖より三陸地方に強震　三陸海岸に高潮		1953NHKテレビ放送開始
		9/28	県内に豪雨被害	1955仙台NHKテレビ放送開始	1953朝鮮戦争休戦
	1957	32年5月	高舘吉田で大火　罹災24戸180名	1955増田町・閖上町・下増田村・館腰村・愛島村・高舘村が合併　名取市となる	
	1959	34年8月	伊勢湾台風	1957仙台空港開港	
	1960	35/5/23	**「チリ地震津波」** 24日閖上港に津波来襲　日本国内での死者142人　家屋全壊1500戸余　半壊2000戸余 元禄12年(1700年)には北米を震源とする津波があり、宮古市、清水市の記録に「地震がないのに津波が来た。不思議である」という記録があります		1960新日米安保条約・行政協定調印

年号	西暦	年/月/日	災害の記録	宮城・名取の出来事	日本の主な出来事
昭和	1962	37/4/30	県北部に地震　被害額40億円		1961ソ連世界初の人工衛星打上げ成功
	1964	39/6/16	新潟地震【M7.5】 新潟・秋田・山形の各県を中心に被害　最大震度5　死者26人家屋全壊1960戸半壊6640戸　津波が日本海沿岸一帯を襲来	1964東北放送カラーテレビ放映開始	1964東京オリンピック 1965米軍北ベトナム爆撃
	1978	53/6/12	宮城県沖地震【M7.4】 死者28人　負傷者1325人　住家全壊1183戸　半壊5574戸　道路破損888箇所　山崖崩れ529箇所 暗闇の路上には人と車があふれ、ラジオのアナウンスが殺気立った声で死傷事故、津波などの情報を次々と流す。一瞬のうちに襲った不測の災害は、まるで地獄絵図のようなパニックを作り出した。(6/13河北新報)	1971仙台空港ターミナル完成 1972熊野堂古代神楽、道祖神神楽、花町神楽、閖上大漁唄い込み踊、麦搗き踊、熊野堂本宮社付属獅子舞が無形文化財に	1970大阪万博開幕
	1983	58/5/26	日本海中部地震【M7.7】 秋田、北海道、青森県を中心に被害。 死者104人、負傷163人、住家全壊934戸、半壊2115戸　日本海で大津波(死者のほとんど100名が津波による)	1974那智神社懸仏・銅鏡が国の重要文化財になる 1982東北新幹線開業	
	1986	61年	集中豪雨により名取市内に被害	1987仙台市地下鉄開通	
平成	1989	元年/11/2	三陸沖で地震【M7.1】 青森、岩手県で最大震度4、久慈で1.3mの津波を観測	1989仙台市政令指定都市に 1990仙台空港国際定期便就航	1989昭和天皇崩御、平成と改元
	1990				
	1994	6/9/22	九・二二豪雨　名取市で集中豪雨　全半壊4棟、床上浸水964戸、停電、断水、橋梁破損		
		6/12/28	三陸はるか沖地震【M7.6】 青森県八戸市で最大震度6　死者3人、負傷者788人住家全半壊501戸		
	1995	7/1/17	兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)【M7.3】 兵庫県南部で最大震度7　死者行方不明者6437人	1997名取市文化会館開館	
	1998	10/9/16	閖上で竜巻被害		
	2003	15/5/26	宮城県沖(三陸南)地震【M7.6】 岩手・宮城県で最大震度6弱　負傷174人家屋全半壊23戸	2003JR名取駅新駅舎完成	
		7/26	宮城県北部連続地震【M5.3～6.2】 南郷・矢本・鳴瀬町で最大震度6強		

○災害の警鐘（震嘯記念碑・津波の碑）

津波碑とは、津波により被害を受けた地域で、将来のために警告、教訓などとして建てられたもので、東北３県では、明治三陸地震津波以降 300 基を超える津波碑が建てられたことが確認されています。

宮城県北部や岩手県などリアス式海岸線の被災地の津波碑がよく紹介されていますが、仙台平野にも立てられました。三陸などの被害と比較して被害が軽微であったこともあり、その数は３基を数えるにすぎません。

その３基は、名取市の１基と山元町の２基で、津波により３基とも被害を受け、すべて倒壊しました。幸い名取市の１基は、もとの位置ではありませんが日和山西側斜面に、山元町坂本津之峰明神社のものは、流失したものの中浜小学校校庭に、それぞれ倒れたまま仮置きされています。磯浜漁港にも 1 基ありましたが流失し、現在所在は不詳です。この 3 基の碑は、昭和８年の三陸津波発生時に建設されたものです。

東北 3 県(宮城・岩手・青森)の津波碑の内訳は、明治三陸津波のものが 124 件(10 件)、昭和三陸津波のものが 150 件(66 件)、チリ地震津波などが 24 件となっています。(()内は宮城県内の数)

明治三陸津波に比べて昭和三陸津波の被害が少ないにも関わらず、昭和の津波碑が宮城県内では 10 倍となっているのは理由があります。

それは、昭和三陸津波では東京・大阪朝日新聞社が紙面上で義捐金を募り、３県に分配しました。その一部を記念碑の建設資金として指定したことにより、多くの津波碑が建設されることとなりました。日和山の震嘯記念碑もこれを受けて建設したものです。

昭和八年三月三日午前二時三十分突然強震アリ鎮静後約四十分ニシテ異常ノ音響ト共ニ怒濤澎湃シ來リ水嵩十尺名取川ヲ遡上シテ西ハ猿猴園ニ到リ南ハ貞山堀廣浦江一帯ニ氾濫セリ浸水家屋二十餘戸名取川町裏沿岸ニ在リシ三十噸級ノ発動機漁船数艘ハ柳原園ノ畑地ニ押上ゲラレ小艇ノ破碎セラレタルモノ尠カラザリシモ幸人畜ニハ死傷ナカリキ縣内桃生牡鹿本吉ノ各郡及ビ岩手青森両縣地方ノ被害甚大ナリシニ比シ輕少ナリシハ震源地ノ遠ク金華山ノ東北東約百五十浬ノ沖合ニ在リテ濤勢ノ牡鹿半島ニ遮断セラレ其ノ余浪ノ襲來ニ過ギザリシト河口ノ洲丘及ビ築堤ノ之ヲ阻止シタルトニ因ルナリ震災ノ報一度天聴ニ達スルヤ畏クモ　天皇皇后両陛下ヨリ御救恤トシテ御内帑金ヲ御下賜セラル　聖徳ノ宏大ナルコト洵ニ恐懼感激ニ禁ヘザルトコロナリ惟フニ天災地變ハ人カノ豫知シ難キモノナルヲ以テ緊急護岸ノ萬策ヲ講ズベキハ勿論平素用心ヲ怠ラズ變ニ應ズルノ覚悟ナカルベカラズ茲ニ刻シテ以テ記念トス

昭和八年十一月三日

閑上町長　渡邊卓郎篆額

従七位勲八等　加藤忠蔵撰文

勲八等　赤松僖一郎書

宮城縣本吉郡志津川町

石工　阿部清蔵刻

震嘯記念

地震があつたら津波の用心

昭和八年三月三日午前二時三十分突然強い揺れがありました。揺れがおさまってからおよそ四十分後に異常な音とともに波が荒れ狂い盛り上がり押し寄せてきました。波の高さは三ｍばかり、名取川をさかのぼり、西は猿猴まで、南は貞山堀広浦湾一帯に広がりました。

浸水した家屋は二十軒前後、名取川町裏の沿岸に繋いであった、三十㌧級の発動機付の漁船数隻は柳原囲の畑地に押し上げられ、発動機の付いていない小さな漁船も多く破損しました。

幸い当地では人や家畜に死傷はありませんでした。県内桃生郡・牡鹿郡(現石巻市)、本吉郡(現気仙沼市)及び岩手県、青森県両県地方の重大な被害に比べて被害程度が軽かったのは、震源地が遠く金華山沖東北約二百八十キロ沖合であったこと、牡鹿半島が途中にあって津波が遮断され、直撃ではなくその余波が到達したにすぎないものであることと、前面に広がる砂丘及び(貞山堀の)堤防があったからです。

震災の知らせは、宮中にも届き、天皇皇后より救済のため義捐金が届けられました、誠に恐れ多いことでありました。

思うに、自然災害は人が予知できないものであるから、津波対策のため護岸整備などの対策を考えることはもちろん、日常生活においても緊急の場合の事を忘れず、万一の場合には、対応ができるよう準備する必要があります。ここに、刻んで後の教訓として残します

昭和八年十一月三日

閑上町長　渡邉卓郎　篆額　（碑の上部の題字）

従七位勲八等　加藤忠蔵　撰文

勲八等　赤松僖一郎　書

宮城県本吉郡志津川町

石工阿部清蔵　刻

（裏面）

此の記念碑は朝日新聞社へ寄託の義金二十餘萬を罹災町村へ分配せられ尚其残額の分配をうけて建てたものである

山元町　中浜小学校校庭

津波碑の現状

《震嘯記念碑(第４号)》

昭和８年に発生した三陸津波の記念碑が名取川右岸、東部道路北側に建てられています。元は土手下の河原に位置していたことが伝えられています。日和山の震嘯記念碑に比べると小さなものですが、碑文(ひぶん)から１号～４号の４基の碑があったことが分かります。しかし、現在１号～３号は確認できません。１号は広浦貞山橋南、広浦と貞山堀が接する付近堤防上に位置していたことが記録されていますが、震災前に失われ現存しません。

この津波碑は、設置年月日は定かではありませんが、日和山の記念碑と合わせ建てられたものと考えられます。この碑は建設を指示されたものではなく、定形型の記念碑とは形も大きさもことなります。標柱型の碑が合わせて建設されることは他地域ではあまり例がなく、具体的に津波到達地点を明示することによって、より効果的な警鐘を図り、津波に対する防災意識を高めようとする、強い意志が伝わってきます。

碑文

北面　昭和八年三月三日　震嘯記念

西面　地震があったら津浪の用心

南面　標柱４本の第４号

東面　本標の位置は津浪来襲の終点です

震嘯記念碑(第１号)

津波碑の現状

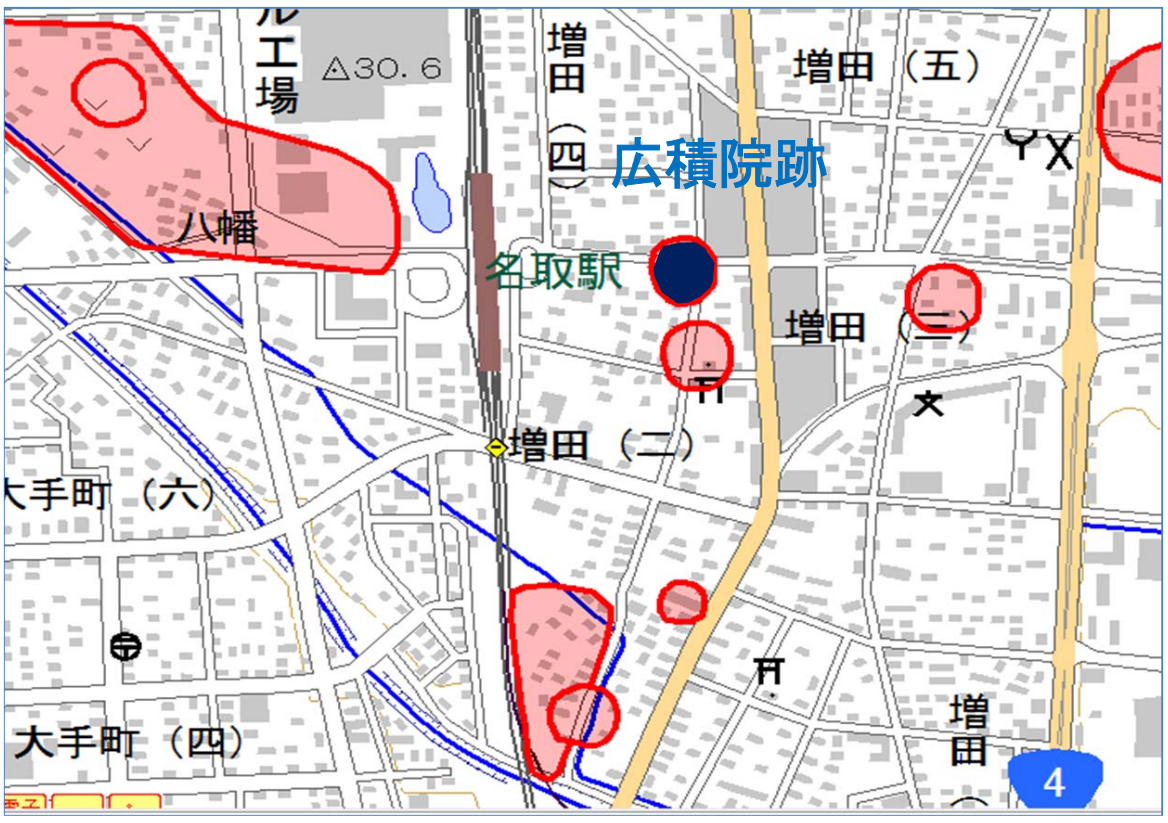
○大地に刻まれた地震・広積院の記録から

（『永禄以来当院記録年鑑』妙見山広積院　祐栄著より）

この日記は、江戸時代名取郡増田村にあった広積院の第 14 世祐栄の手によって書かれた記録です。水田の豊作・不作・いもち病のこと、飢饉のこと、洪水・地震などの天災のこと、彗星の出現をはじめとする天文のこと、穀物の価格のことなどについて記されています。記事の中には近隣や仙台だけでなく、遠く江戸や京都のことなども記されています。

祐栄は宝永 2 年(1705)に生まれ、明和 4 年(1767)に 62 歳で没しました。永禄 5 年(1562)から 140 年間は代々の記録からとりまとめられ、明和 3 年(1766)まで書かれています。彼の死後寛政 6 年(1796)までの 30 年間は、記入者は不明ですが書き足しています。広積院は「封内風土記」増田邑の条には「修験者流、伊具郡金津東光院末寺」との記載があります。祐栄自身が大峰山での修行経験もあるように、修験者の交流の中で各地の情報を得る機会も多かったものと思われます。

ここでは、文献に記録された地震・津波を中心に、洪水、災害など自然現象に関しての記述をとりあげましたが、当時の社会情勢を知るだけでなく、天文分野ほか広い分野で活用できる資料として貴重なものです。



広積院跡の位置

『永禄以来當院記録年鑑』

●「永禄５年（1562）当院柳生村八日市場より当所に移る　　祐栄」

とあり、この年から記録が始まっています。

永禄 6 年(1563) 4 月 2 日東大寺で落雷により火災があったこと

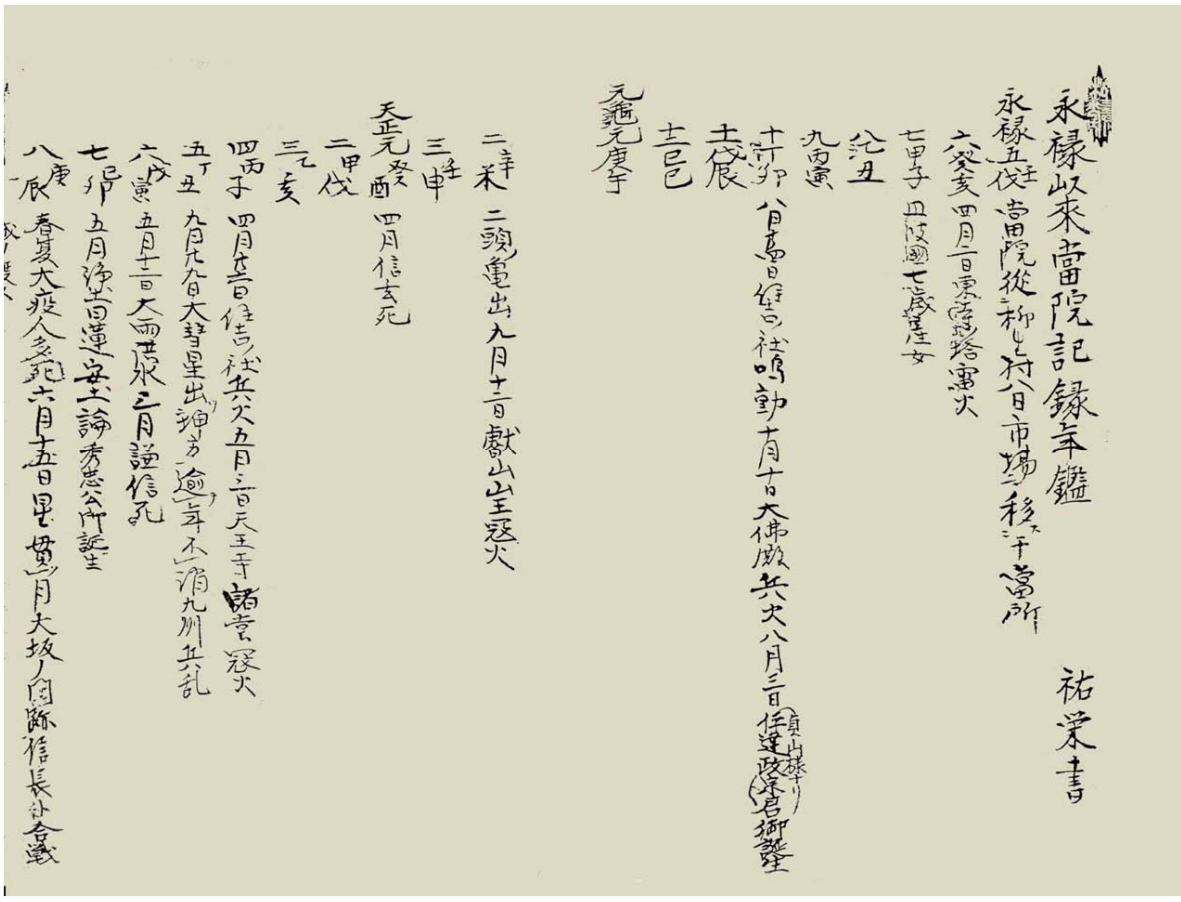
10 年(1567)　8 月 3 日伊達政宗生誕

10 月 10 日東大寺大仏殿の兵火

元亀 2 年(1571)　9 月 12 日信長による比叡山の侵攻、放火

天正 6 年(1578)　5 月 12 日大雨洪水

など、代々の記録から記述を始めています。


永禄以来當院記録年鑑

祐栄書

永禄五戊午當院從柳生村八日市場移于當所

六癸亥四月二日東大寺落雷火

七甲子四月國七歳生女

九丙寅

十丁卯八月高日信長鳴動有り大佛殿兵火八月三日任達政宗誕生

土戊辰

十己巳

元亀元庚午

二辛未二頭龜出九月十日獻山王冠火

三壬申

天正元癸酉四月信玄死

二甲戌

三乙亥

四丙子四月十日信長比叡山兵火五月二日天王寺諸堂焼火

五丁丑九月九日大彗星出現方逾年不消九州兵乱

六戊寅五月十日大雨洪水二月謀信長死

七己卯五月洪水日蓮宗上論宗恵公所誕生

八庚辰春夏大疫人多死六月十五日星貫月大坂人図謀信長計倉戦

永禄 5 年　冒頭部分

●享保２年(1717)

４月 ３日 大地震　当地北町傳蔵　傳衛門　家押し倒す

享保宮城沖地震と呼ばれているもので、記述から、増田付近では震度５規模の地震であったことが推定できます。

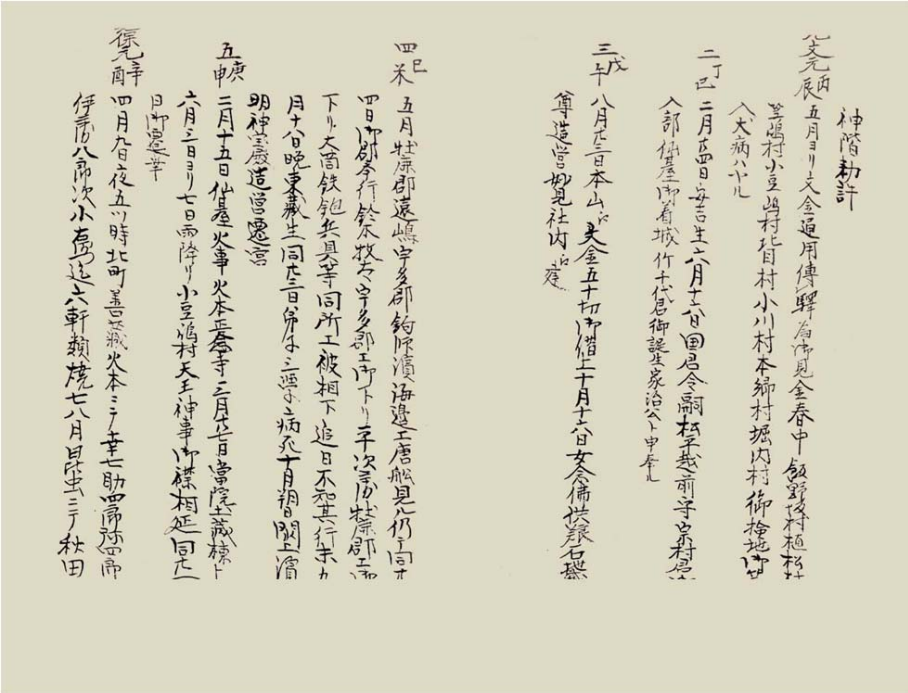
８月 16 日 暴雨のため洪水が起き、岸を崩し、広積院も浸水した

●元文４年(1739)

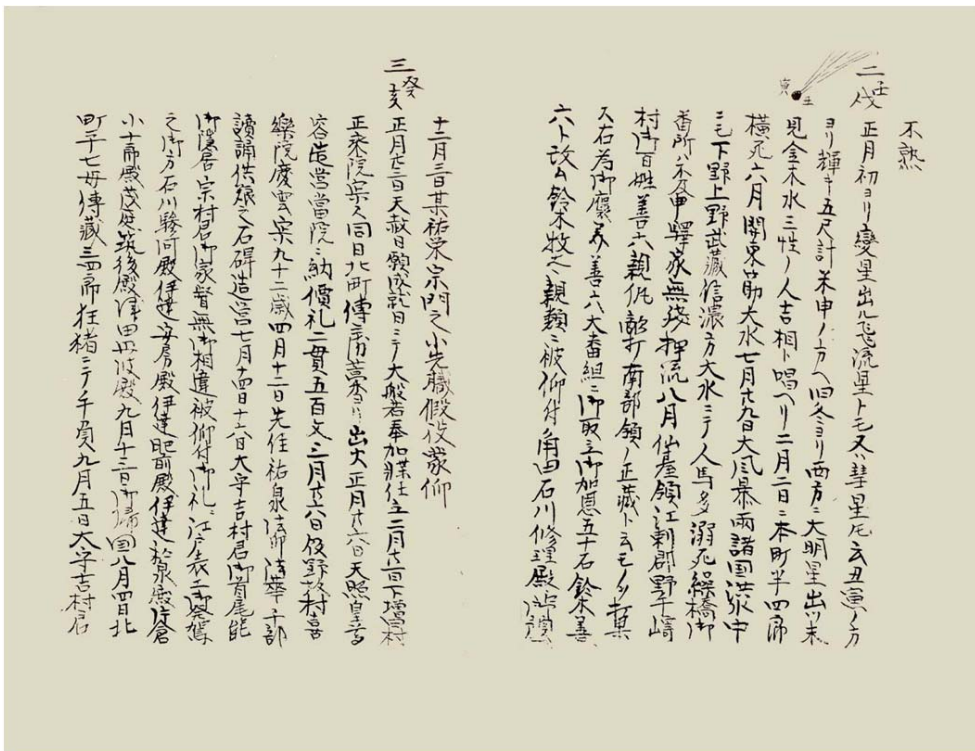
10 月 １ 日 閑上濱明神宝殿造営し遷宮した

●寛保元年(1741)

４月９日 夜８時頃　北町善蔵宅が火元で幸七、助四朗、弥四郎、伊兵衛八郎次　小左衛門まで６軒が類焼した



寛保元年　北町（現増田３丁目付近）で火事、６軒類焼



寛保２年　飛流星の記事図も描かれている

●寛保２年(1742)

正月初めより変星がでた。飛流星(ひりゅうせい)とも彗星(ほうきぼし)とも呼んでいる。東北の方から西南方向に輝いていた。冬に大明星(だいみょうじょう)があらわれ、金木水星(きんもくすいせい)の人は吉相と言い合った

●寛延元年(1748)

６月　５日　大風大雨

６月 27 日から８月７日まで雨が降らなかった

７月 26 日　藤曽根大師堂にて雨ごいの祈祷(きとう)をした

８月　６日から８日まで雨が降った

８月９，10，11 日浦々津浪

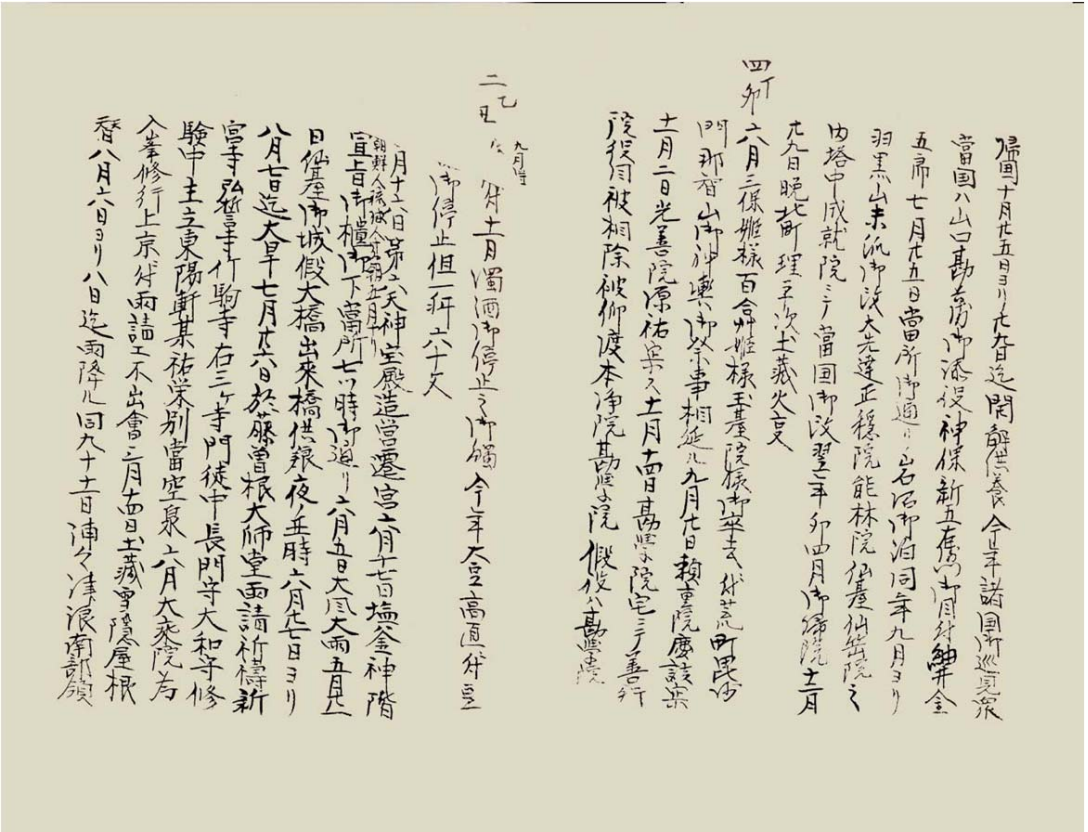
南部領津軽領秋田領３か年不作で飢饉となった。浪人乞食の数が多かった

記録には「津波」と記録されているものの、江戸時代の古文書の中には高潮も津波と表現している例もあること、自身の記録にも地震の記載がないこと、他の文書などにも地震の記録はないこと、三日間連続していることなどを考え合わせると、地震による津波ではなく高潮による例かもしれません。今後の精査が必要と思われます。

●寛延２年(1749)

６月 19 日大雷数ヶ所で落雷、雨　この大雷、雨が、28 日まで続いた

８月中雨が降り、湿度が高く稲が腐って熟さず、そのため米の価格が上がり、生活に困った



寛延元年　藤曽根大師堂での雨乞い祈祷

●宝暦元年(1751)

4月25日越後高田で大地震がおきる。家が倒壊し、多くの人が亡くなった

5月 1日午前10時頃、暦には記載のない日食があった

●宝暦4年(1754)

5月16日より7月12日まで日照りで、苔類、蕪が生えなかったが,水田の水は豊富だった。しかし穀物は実らなかった。

5月26日大雨

7月 7日夜10時、地震

7月12日雨

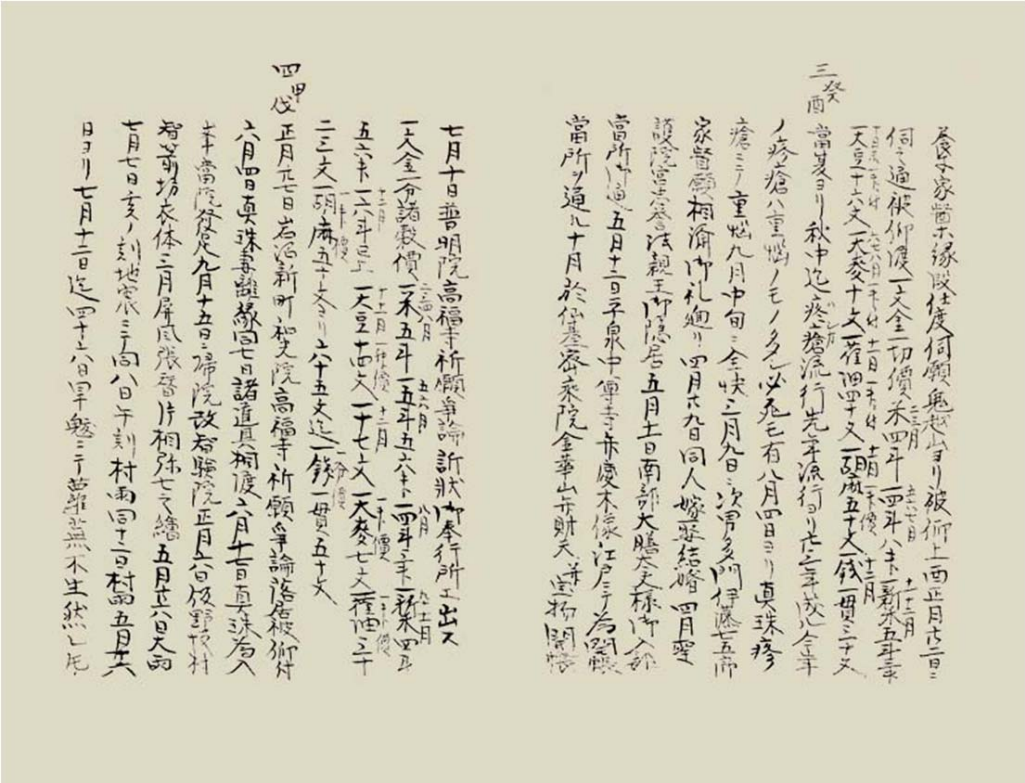
7月16日中田町で珍獣が捕獲された。名前を知る者はなく、藩では“タヌキ”と名付けた

8月中　当北町勘十郎という者も捕獲した。マミ(狸)に似て爪が長い

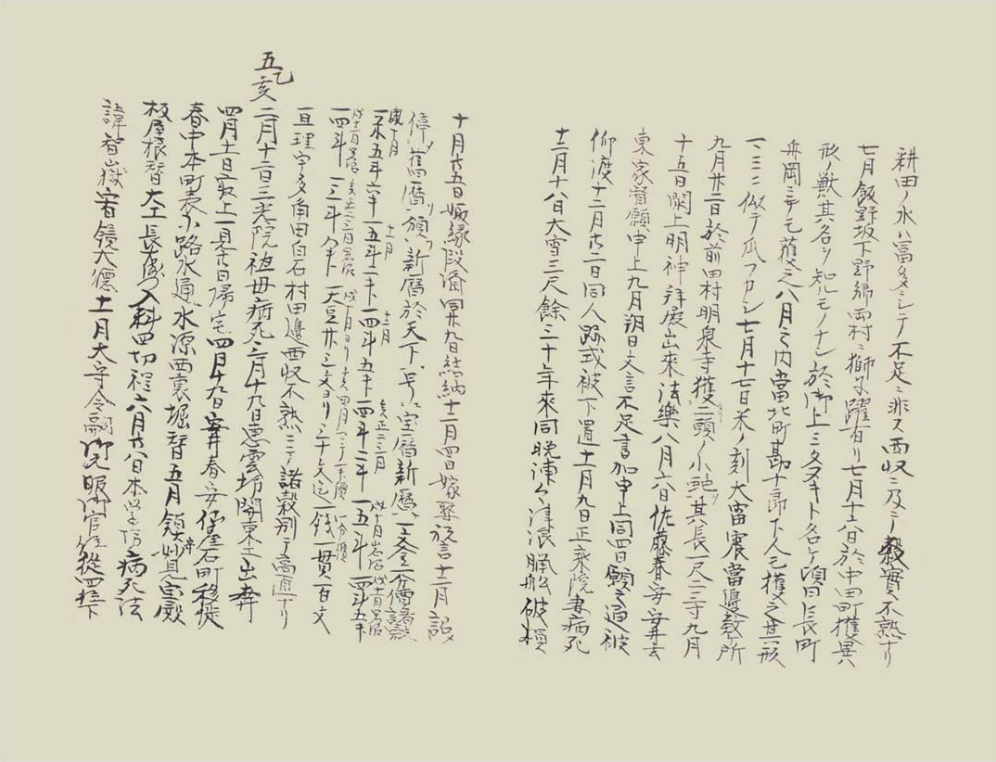
9月15日閑上明神拝殿(はいでん)出来た

12月18日三十年来の大雪、この晩、浦々に津波があり漁船が破損した

この津波についても、この年にあった地震の記録は7月7日のみで12月の記録はなく、この年地震が頻発したことを示す資料も残されていません。他地域の地震による津波の可能性もありますが、地震津波かどうか今後の調査が必要です。



宝暦４年　７月７日地震の記述



宝暦４年　12 月 18 日　津浪の記事

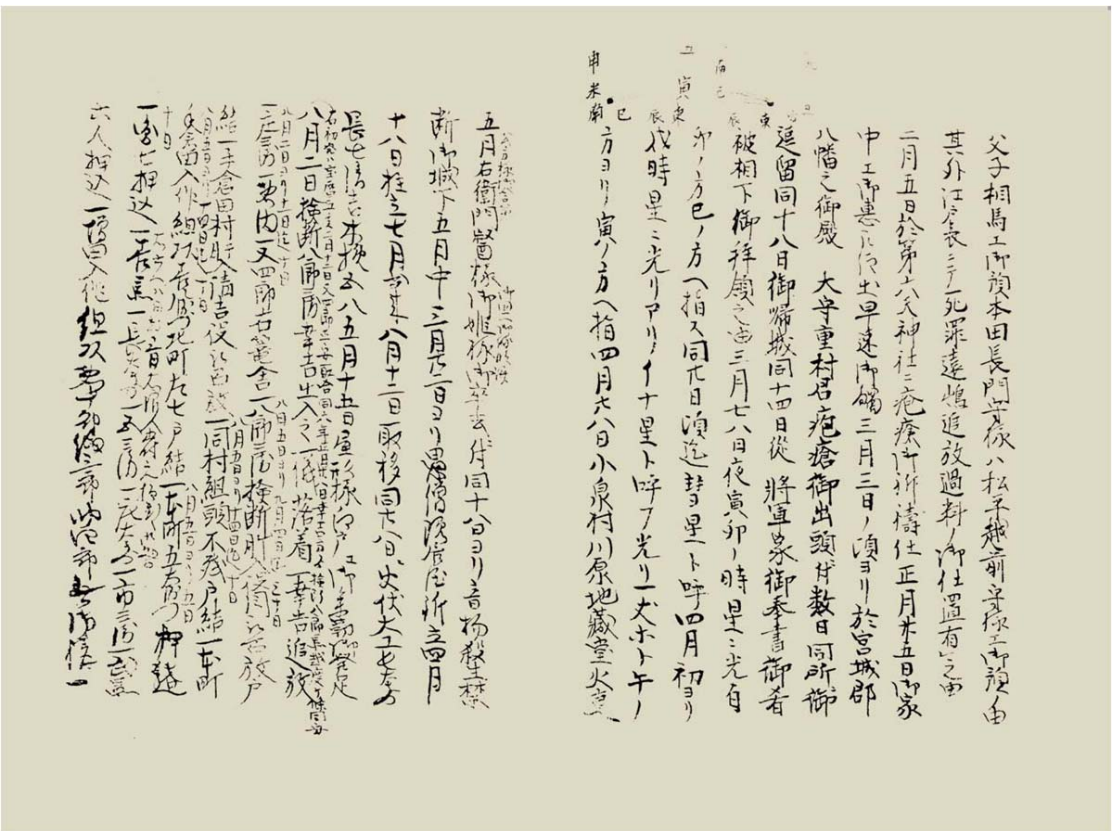
●宝暦９年(1759)

３月７、８日夜５時頃から20日頃まで、彗星(ほうきぼし)が出現した

４月初めより夜の８時頃に彗星(イナ星)が出現した

江戸時代“彗星”の呼び方は、地方の特色がありいろいろな呼び名があります。この項で彗星(ほうきぼし)とイナ星と書き分けをしているのは、彗星の尾の部分が長く、掃いたように広がったものを指し、イナ星(稲星)とは、稲の穂先のように尾の幅が比較的狭いものを指します。これにより書き分けているものと思われます。

11月７日朝８時頃、北町伊七の酒蔵上屋根より出火し、殻蔵まで消失した



宝暦９年　３月７、８日　彗星出現の記述

●宝暦 10 年(1760)

元日正月の初め暖かく、蕪、大根、菜種の花が咲いた

●明和 3 年(1766)

正月 10 日夜 12 時頃より、11 日昼頃まで、大雪 1m近く積る

1 月 28 日津軽領(青森県)で大地震

4 月 28 日夜 11 時頃、光もの飛ぶ

●明和４年(1767)

３月 26 日昼４時頃、大地震があった。以後日に５、６回地震があった。

４月７日朝 10 時頃、大地震があった。地割れがおこり、川の水が遡上(そじょう)した、閖上の男女は正気を失った。毎日６度づつ 15 日まで地震が続いた

９月 30 日にまた大地震、春３月 26 日の地震と同規模のもので４、５度おきた。

明和三陸沖地震と呼ばれる地震で、地割れ、津波も発生したことが分かります。また９月に同規模の地震があったことも記載され、余震も大きかったことが分かります。震度６前後と推定されます。

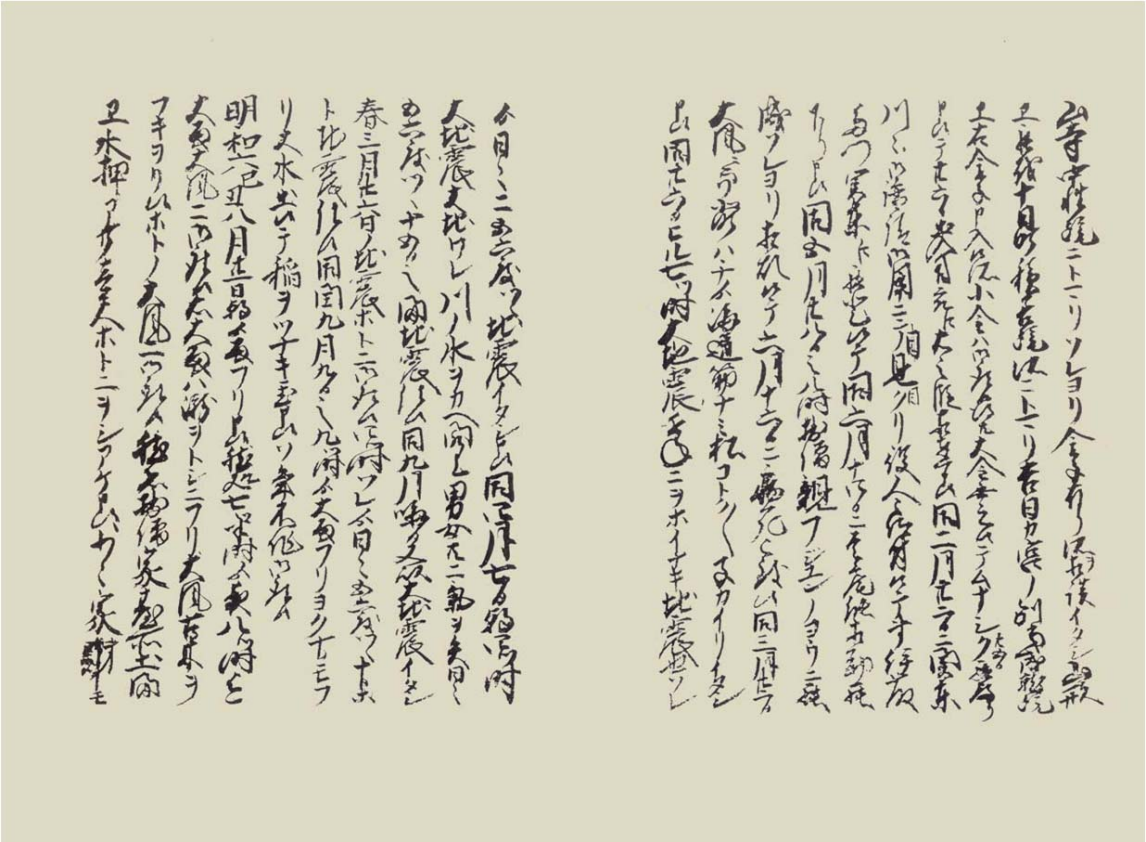
９月９日大雨、翌日の 10 日も雨、大水となった。稲を繋ぎとめ防いだがこの年は不作だった

●明和５年(1768)

７月 21 日二百十日朝より大雨。仙台川(広瀬川)、名取川大水で洪水となった。五間茶屋裏通りの家は流され、橋本(元)の一軒は屋敷が崩れ流された。橋も流され、男女数人が亡くなり、牛や馬も流された。中田橋も流され、閖上浜町中に水が 1m近く押し上げ、町中船で漕(こ)ぎ歩く状態だった

●明和６年(1769)

８月 22 日雨、朝７時頃から夜 10 時頃まで大風雨。北町上橋より皆々家 0.6mほど水につかる



明和４年　３月、４月の地震について。

町の様子が詳述されている

●明和７年(1770)

春３月頃までは雨が降ったが、それ以降天気が続き５月１日、２日に雨が降った後は６月１日に降っただけで干ばつとなった

●明和８年(1771)

干ばつ、４月 18 日に少し雨が降ったが、後は降らないため半分しか植えつけができなかった。雨乞いの祈祷(きとう)が方々で行われた

●天明元年(1781)

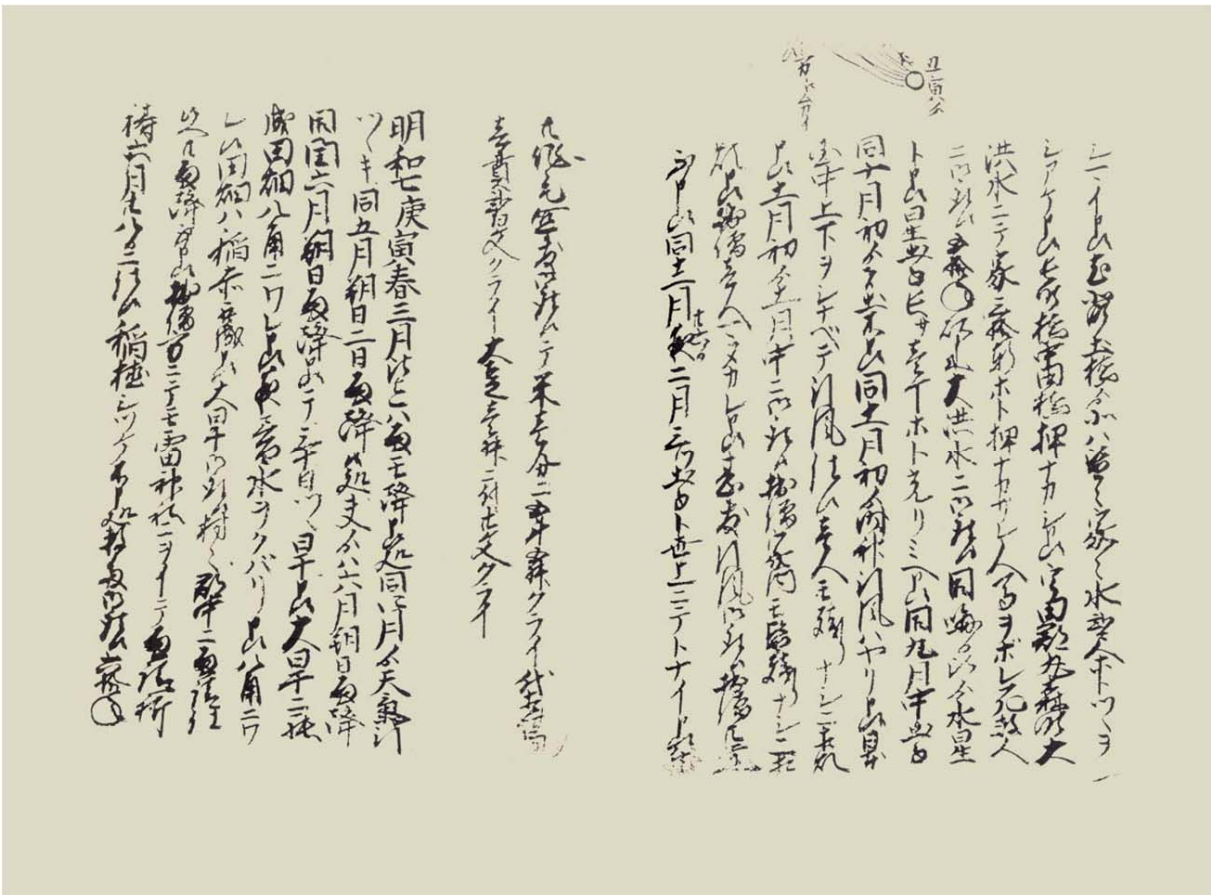
７月 11 日　晩から雨が降り、12 日大洪水

●天明３年(1783)

１月 16 日　約 1mの大雪となった

６月 17 日　大風雨、増田川から飯野坂まで畑に 1mほど水があがった。

名取川は八ツ口から 900mほど決壊した



明和７年　天候不順と干ばつの記述

●天明４年(1784)

正月から寒気強く、食糧なく、飢渇(きかつ)のもの道端で寒さにより死ぬ者があった

●寛政５年(1793)

正月７日　昼 12 時頃大地震、2 時までに 3 度大地震があった。

増田周辺は 8 日朝まで小地震が 30 回あった。

8 日の午後 7 時頃また大地震、9 日より 13 日まで小地震数度あった。百年来の地震であった。増田では家の棟や梁が折れ、壁が飛び倒れ、崩れた。

地震により大きな被害があったことが記されており、余震も多く発生しています。M8 に近い地震であったことが推定されます。

④【大地に刻まれた地震・津波痕跡】

○下増田飯塚古墳群の津波痕跡

ＪＲ名取駅の南東約 3～4km 地点に所在する下増田飯塚古墳群では、平成 16 年度～平成 20 年度に臨空都市の整備に伴う発掘調査が実施されました。市内には大きく 3 列の浜堤列が認められますが、本古墳群は現海岸線の西側約 2km 付近に南北方向にのびる 2 列目の浜堤上に立地しています。この浜堤上の標高は 2m 前後で、現在は遺跡内を県道塩釜・亘理線が南北方向に貫いて走っています。また、浜堤の東西両側の区域は、昔から低湿地が広がっていたものと考えられており、つい最近まで水田耕作が行なわれていた田園地帯でした。

平成 17 年度に実施した低湿地部の調査では、平安時代初め頃（今から約 1,100 年前頃）のものと考えられる水田跡や用水路などが見つかっています。水田跡は田面が砂で覆われた状態で見つかっており、粒度などの特徴から、この砂は海のものである可能性が高いことが分かりました。また、この砂層は、水田の中だけでなく用水路の中や、周辺一帯の低湿地部など広範囲で確認されていることから、津波によって運ばれてきたものの可能性があります。この砂層より下位にある土の中からは、9 世紀頃のものと考えられる土師器・須恵器と呼ばれる土器が出土し、上の方にある土の中には、10 世紀初頭頃に降下したと考えられている灰白色火山灰の層が認められることから、この砂層は、貞観 11 年（869）の地震による津波で堆積した砂層の可能性があります。

○原遺跡の地震痕跡

ＪＲ名取駅の北西約１km付近の田高字原地内にある原遺跡は、縄文時代～近世にかけての遺跡で、標高 8m 前後の微高地上にあります。平成 7・8 年頃から今日まで多くの地点で発掘調査が行われた結果、弥生時代中期頃（今から約 2000 年前頃）のお墓やゴミ捨て場、鎌倉・南北朝時代（今から約 700～800 年前頃）の屋敷跡などが見つかっています。

《 褶　曲 》

24 年度に実施した原遺跡の調査では、地層が大きく歪んだ部分が発見されています。これは地層の片側から大きな力が加わった事により形成された褶曲の痕跡だと考えられます。

通常は大陸のプレートの移動などにより長い時間一方から強い力が加わって形成されることが多いですが、地震などにより短時間の内に形成されることもあるようです。

いつ頃形成されたものかは明らかではありませんが、上位にある地層も一緒に歪んでいることから、江戸時代以降のものではないかと思われます。

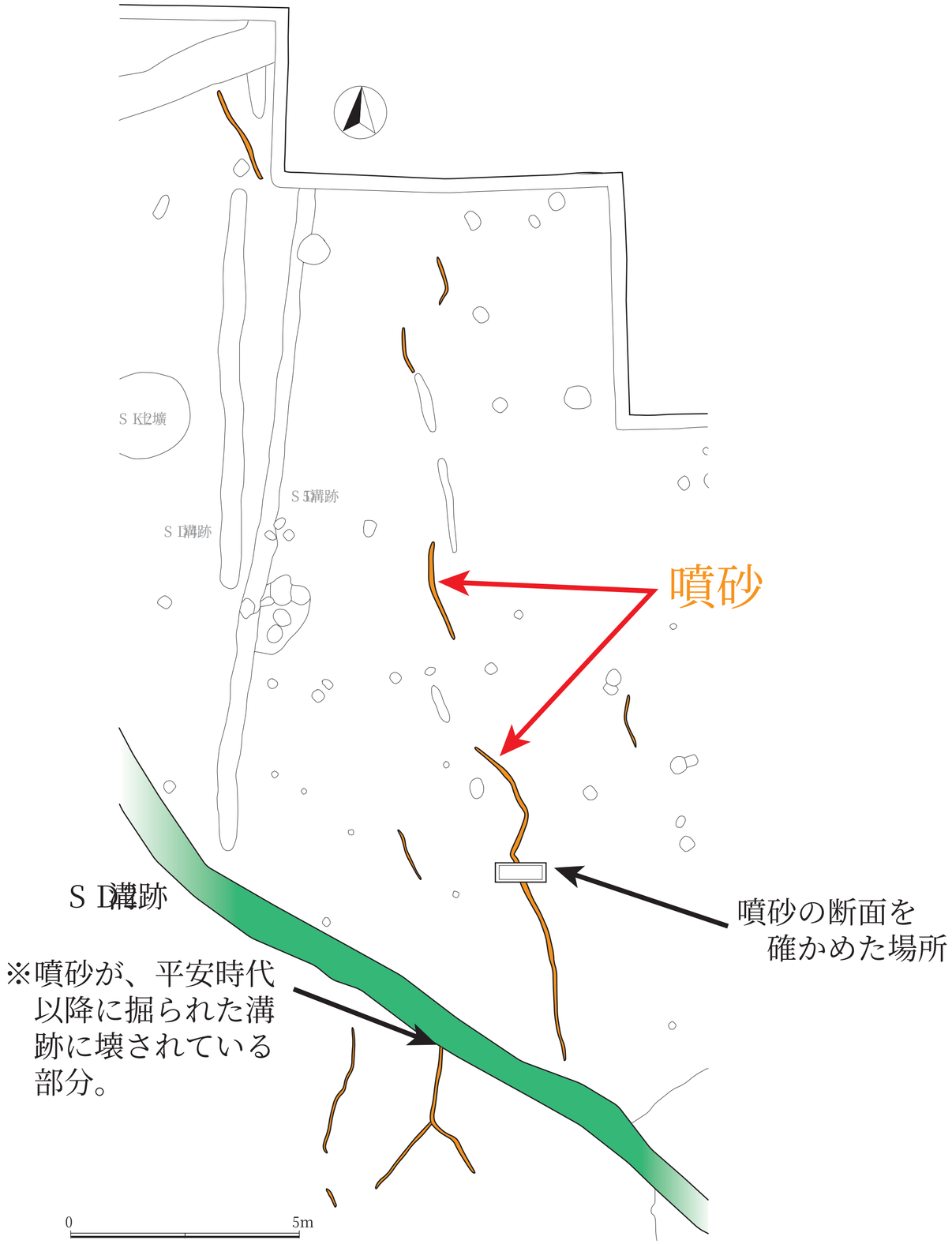
歪んだ地層のようす

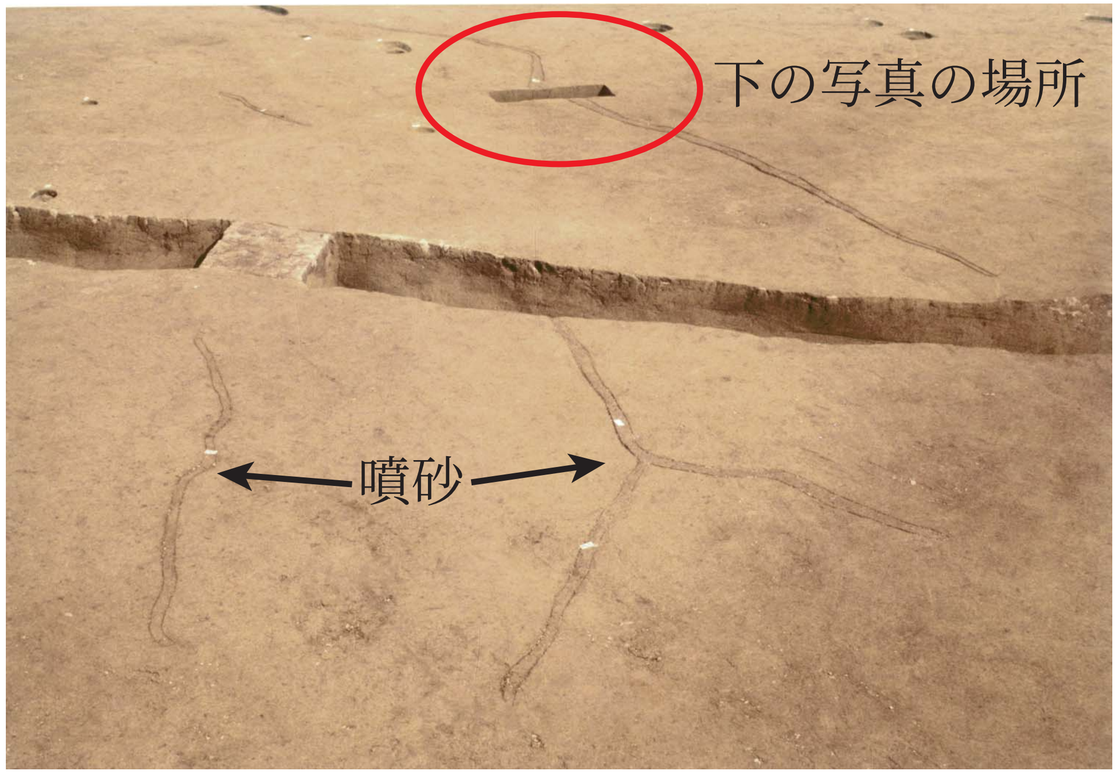
《噴（ふん）　砂（さ）》

平成 12 年度に行われた発掘調査では、「噴砂」と呼ばれる地震による地面の液状化現象の痕跡が見つかっています。地面の上から見ると、細長い枝状に延びた筋のように見える（左の写真）もので、地面を掘って断面を見てみると、地層の下にある砂が、上の地層を突き破って噴き出している状況（右の写真）が分かります。いつ頃の地震で液状化現象が発生したのかはっきりしたことは分かりませんが、噴出した砂が突き破っている地層が堆積した時期などから、縄文時代晩期後半（今から約 2,500 年前頃）以降に発生した大規模な地震によるものと考えられます。

このような地震による液状化の痕跡は、仙台市若林区荒井広瀬遺跡や、仙台市太白区大野田に所在する王ノ壇遺跡、太白区郡山に所在する北目城跡、若林区中在家南遺跡などでも見つかっており、同じく縄文時代晩期後半以降や弥生時代以降の大きな地震によるものと考えられています。

大地震の痕跡：噴砂（土壌の液状化現象）





噴砂を確認した様子

噴砂の断面を確認した様子